

# 『孫子』 殘簡発掘の意義

清 宮 剛 (文学部助手)

(一)

一九七二年一月から四月にかけて長沙馬王堆が発掘され、夥しい埋葬品とともに二千年を経た婦人の死体が腐乱せずに発見されたことは我々の記憶に新しい。考證の結果この墓は西漢時代に在位したといわれる軟侯の夫人のものであった。さらに最近日本の新聞でも報じられた如く、山東省の臨沂という所でも墓が発掘され、誰のものであるかは不明だが同じく西漢時代のものと推定された。この臨沂の発掘も同じ一九七二年四月に行なわれたらしいが、資料の整理その他で発表が遅れたらしい。この墓からは半兩銭と三銖銭が発見されたが三銖銭というのは「漢書・武帝紀」によれば、建元元年(B.C.140)に始めて作られ同五年(B.C.136)には停止されているので、この墓は早ければB.C.140年頃のものであるろう。さらにこの墓からは武帝の元狩元年(B.C.118)に作られたといわれる五銖銭が出てこない所から考えるなら遅くともB.C.118年までということになる。以上「文物」に基づくこのようにB.C.100年以上も前のものが今日にあって発見されるということは、単に考古学的な興味以外にも、

我々中国思想を学ぶものにとつても重要なものがある。馬王堆と臨沂墓の比較によって重要なことは、副葬品以外に臨沂墓からは多数の竹簡が発見されたことである。

もちろん馬王堆から発見された帛画や中棺は当時の文化を知る上で重要な手がかりではあるが、ここから発見された竹簡はごく僅かである。これまでの中国の発掘によって発見された竹簡の重要なものは一九五九年の甘肅省の東漢墓からの「儀礼」と一九七二年十一月発掘の武威早灘坡の東漢墓からの医薬簡があるだけで、今回の臨沂のように多数の竹簡を発掘したのは初めてである。残念ながらこれら多数の竹簡は中国でも未整理であり、我々が目に見えるのは「文物」二期に発表された八十枚の写真のみである。以下「文物」の記載に基づきつつ概略の紹介と感想を述べてみたい。

(二)

一・二号墓の竹簡総数は四千九百枚近くであり、現在整理されたのはその中の八百三十枚のみであり、それら

は以下の三つに大分される。

一、周秦諸子

1. 六韜殘簡五十四枚
2. 孫子十三篇殘簡一百五枚
3. 尉繚子殘簡三十六枚
4. 管子殘簡十枚
5. 晏子殘簡一百十二枚
6. 墨子殘簡一枚・附佚文四十二枚

二、佚書叢錄之一

1. 漢元光元年(B.C. 134)曆譜三十二枚
2. 齊孫臏兵法殘簡二百三十二枚
3. 相狗經殘簡十一枚

三、佚書叢錄之二

- 陰陽書及風角災異雜占殘簡
1. 曹氏陰陽書殘簡二十四枚
  2. 風角占殘簡五十一枚
  3. 災異占殘簡五十三枚
  4. 雜占殘簡八十二枚

これらの整理された殘簡を概観してまず注意すべきことは、兵家の書が非常に多いということである。中でも孫子・孫臏に関する竹簡は多く、これまで学会で疑問とされてきたものに一つの解決を与えるものがある。

さて孫子に關しての古い記事は「史記・孫子吳起列伝」である。

孫子武者齊人也。以兵法見於吳王闔廬、闔廬曰、子之十三篇吾盡觀之矣。……於是闔廬知孫子能用兵、卒以為將、西破彊楚入郢、北威齊晉頭名諸侯、孫子与有力焉。孫武既死、後百有餘載有孫臏、生阿鄜之間、臏亦孫武之後世子孫也。孫臏嘗与龐涓学兵法。……

・・・齊將田忌善客待之。……於是忌進孫子於威王、威王問兵法遂以為師。……孫臏以此名顯天下、世伝其兵法。

「史記」では八巷問軍事を論ずる者はみな孫子十三篇を云々し、また吳起の兵法も世に多く伝わっている。だからここにはそれを論じないで、二人の行跡と施行設計の事蹟を論じた。✓と司馬遷みずからが最後に述べているように、兵法自体に關する記事は少なく、孫武が吳王闔廬の寵姫を殺して用兵に堪能なことを示した記事、さらに孫臏が、かつて同学でありながら罪に陥し入れられた龐涓に仇を反す話などが大部分を占めている。

しかし問題はこの中で孫武が齊人で吳王闔廬に面会し、その際闔廬が八子之十三篇吾盡觀之✓という記事と、さらに孫武の後百余年を経て孫臏という孫武の子孫がいたという記事が一緒に載せられていることである。これに

よれば二人の孫子が実在したことになる。孫臏も又八世  
伝其兵法」とあり著名な兵家であつた。

司馬遷の記述によれば「孫子十三篇」は孫武の自著であ  
ると彼は理解していたようであるが、孫臏には著作はな  
かつたのか、孫武の著とはどういう関係にあるのか、こ  
れらが後世の学者の疑問を呼ぶ所であつた。

「漢書・刑法志」には「呉有孫武・齊有孫臏・魏有吳  
起・秦有商鞅・皆禽敵立勝・垂著篇籍」とあり同一「芸文  
志」には「呉孫子兵法八十二篇」九卷・齊孫子孫臏兵法  
八十九篇四卷」とある。ここに呉・齊に加えられたのは、  
それぞれ仕えた国を示すものであり、呉に仕えた孫武に  
は八十二巻の著述・齊に仕えた孫臏には八十九巻の著述  
がそれぞれあつたことが知られる。しかし「史記」に十  
三篇と記され、「漢志」に八十二篇と記されている事実  
を我々はどう理解すべきなのか、このことにまず考察を  
加え孫臏との関係に移ることにしよう。

魏の曹操が孫子の注を初めて作つたことは有名である  
が、その序文をまず見てみよう。

吾觀兵書戰策多矣。孫武所著深矣。孫子者齊人也、名

武爲吳王闔閭作兵法一十三篇、試之婦人卒以爲將。西  
破強楚入郢、北威齊晉、後百歲餘有孫臏、是武之後也、

審計重舉明畫、深圖不可相誣、而但世人未之深亮訓說、

況文煩富於世者、失其旨要故撰爲略解焉。

この序では孫武が闔閭のために十三篇を作つたことさら  
にその文が煩富であることから撰して略解を作つたこと  
が記されているが、八十二篇については何も述べていな  
い。この兩者に關しては「孫子叙録」に引かれる次の意  
見がある。

按十三篇之外又有問答之辭、見於諸書徵引者、蓋武未  
見闔閭作十三篇以千之、既見闔閭相與問答、武又定著  
爲若干篇、皆在漢志八十二篇之内

つまり現在の孫子十三篇というのは孫武が闔閭に會う前  
に作つたものであり、闔閭に會つてからさらにその問答  
を収めたものが出来たというのである。つまり「史記」  
に記されている十三篇は會見以前のものであり、「漢志」  
にいう八十二篇は面會の後に作られた篇も含んでいると  
いうことになる。これは八子之十三篇、吾盡觀之」とい  
う闔閭の言葉とも符應するものである。さらに「孫子叙  
録」は十三篇と八十二篇に關して「孫子篇卷異同」と題  
して「陸志」「唐書」の記事に基づきつ次のように述べ  
ている。

按八十二篇者其一爲十三篇未見闔閭時所作、今所傳孫  
子兵法是也。其一爲問答若干篇、既見闔閭所作、即諸  
傳記所引遺文是也。一爲八陣圖、鄭注周禮引之是也。

一為兵法雜占、太平御覽所引是也。外又有牝八變圖、  
戰鬪六甲兵、俱見隋經籍志。又有三十二疊經、見唐藝  
文志。按漢志惟云八十二篇而隋志於十三篇之外又有數  
種、可知其具在八十二篇之内也。

ここではさらに細かく孫子の著作を述べ、全体を六つに  
分類しており、前の二つの他に、八陣圖、兵法雜占、牝八  
變圖、戰鬪六甲兵、三十二疊經を加えている。そして  
これらのものすべてが「漢志」のいう八十二篇の中に含  
まれているのだという。この指摘はほぼ妥当なものと思  
われるが、唯これらすべてを孫武の手定と認めるかどう  
かは疑問が残る。しかし鬪鬪との会见以前に作られたと  
いう十三篇は最も古いものとして孫武の自著にかかると  
のであることが認められよう。そしてこの十三篇こそが  
「孫子」の重要かつ精髓を述べたものであり、残りはい  
れらを補足する附随的なものと考えることができよう。  
だから司馬遷はこの十三篇のみを記録したのであり、班  
固は後に作られたものも含めて八十二篇を録したのであ  
ろう。しかし発掘資料に見える災異占殘簡、雜占殘簡  
が、もし「孫子」の殘簡であるとすれば、十三篇以外も  
すでに武帝期には作られていたのであるから、司馬遷が  
何故十三篇のみを記述したのかは疑問が残る。とにかく  
十三篇以外は除々に亡びて行ったものと思われる。ある

いは魏の曹操が「略解」を作る際にこれらを不要として  
十三篇だけを残したとも考えられる。

曹操が「略解」を作ったことは前に述べたが、このこ  
とによって後世、「孫子」が疑われることになる。その  
疑問を提出したのは唐の朴牧である。彼は「樊川文集卷  
十」に「注孫子序」と題して「武所著書凡數十萬言、曹  
魏武帝削其繁剝、筆不精切、凡十三篇成爲一篇」 $\vee$ と述べ  
て、「孫子」十三篇は曹操の擬作であるとした。これに  
対し孫星衍は「朴牧以爲武所著書凡數十萬言、魏武削其  
繁剝、其精切凡十三篇、案魏武叙云撰爲畧解、蓋言解其  
大略、疑朴牧誤似此語、爲武刪削爲十三篇」 $\vee$ （「孫淵如  
詩文集、問字堂集、孫子略解序」）とのべて、朴牧が曹  
操の語を誤解したものであるとして朴牧を非とした。後  
に述べるように卓見といふべきである。

以上孫武と「孫子」について述べたが、孫武の子孫と  
される孫臏の書についてはどうなのか、それについて  
少し述べてみよう。

### (三)

「漢志」では孫臏兵法八十九篇目を著録しているが、  
「隋書經籍志」にはその著録がない。さらに曹操は「孫  
子」の注を作ったが、孫臏に関しては一言も述べていな

い。そこで王世貞は「孫子批釈」の序に次のようにいう。

按孫武事吳、左伝不載、史記列伝称、武為臙之租、臙之兵法伝於後世云則是書殆得於臙、而本於武者歟、つまり現在の「孫子」書は孫武のものを本として大部分は孫臙が作ったものではないかというのである。孫臙兵法八十九篇の実在が疑わしいとすれば、もっともな意見である。さらに王世貞は孫武自身の存在をも疑っている部分もある。このようにして「孫子」の作者は一人か二人か、さらに孫子は実在したのか現在の「孫子」は擬作ではないのか、等々の意見が出てきたのである。

これらの問題に関して今回の銀雀山の発掘はかなりの解決を与えるものがある。まず第一にこの墓からは「孫子兵法」と「孫臙兵法」の二種類が発見されたことを挙げなければならぬ。これは少くとも西漢期にあっては、この二種類の兵書が実際にあったことを証明する。さらに孫武・孫臙の二人とも実在したであろうことがほぼ証明されよう。これによって王世貞の説は否定されざるを得なくなったのである。「孫子」十三篇は孫臙によって書かれたのではないからである。日本の新聞が大きく取り上げた八孫子は二人いた∨という記事はこれを指すものである。さらに発掘された「孫子」十三篇は現在の「宋本十一家注孫子」と篇名がすべて合致するという。

とすれば西漢にはすでに現在と同じ「孫子」があったはずであるから、朴牧のように曹操の擬作であるとする説も否定される。孫星衍の非難が正しかったことがここで証明されたのである。かくてこの発掘はこれまでの学界の疑問に一つの解決を与えるものであった。さらに竹簡に記されている文字から現行本の誤りを正するものもある。「史記」では孫臙と龐涓の馬陵での戦いについて八龐自知智窮兵敗、乃自刳日∨となっているのに対し、同じ記事を「戦国策」では八禽龐涓∨としている。つまり「史記」では龐涓は自殺したことになり、「戦国策」では禽にされたとしており意味が幾分異ってくる。この簡所を竹簡では正に八禽龐涓∨の言があり、「史記」が恐らく誤っていることが考えられる。さらに「虚実篇」中の八出其所不趨、趨其所不意∨の文に対し竹簡には八出于所必○○∨の語がある。宋本明刊本もすべて八不趨∨に作っているが竹簡を信ずれば八出于所必趨∨と作るべきだということになる。さらにその前の文の八安能動之∨の注を見ると曹操は八攻其所必愛、出其所必趨∨といひ、季釜は八出其所必趨、擊其所不意∨といっている所から考へるなら、魏武唐の人の基づいた本は八必趨∨となっていたのであろう。孫星衍はすでにこの点を校定しているが、この竹簡が出てそれがいよいよはっきりしたのであ

る。以上の二点はすでに中国の学者である許荻や羅福頤の明らかにしたことであるが、とにかく現在の竹簡の整理が四千九百枚中の八百三十枚といわれるから、この他にも今までの誤まりを正すものが少くないと思われる。

さらに前の分類の三に属する風角・災異・雑占の残簡が数の上から行くと大きな位置を占めているが、これらの内容がどういふものなのか、竹簡が紹介されない以上推測にすぎないが、これも羅福頤の予想の如く、かつて曹操によって削られた「孫子」の繁剩な部分であったのかも知れない。とにかくこれらの竹簡の性質内容が明らかにされることはこれからの「孫子」研究に大きな役割りを果たすことであろう。

さらに現在まで久しく目に触れなかった「孫臏兵法書」が残簡ながら、ここに発見されたことにより、孫武と孫臏の兵法のどこが違うのかを断片的ながら知ることができ。日本には残簡のすべてが紹介されている訳ではないので、「文物」に載せられる許荻の意見を引用しておこう。

まず第一は「孫子」に比して「孫臏兵法」が篇数から言つてより多かつたであろうこと。

「五共篇」では残簡では△二百五十国字▽と記しているが、今残つているのは僅かに九十五字であり約半分であ

る。又△四百六字▽と記しながら僅かに十字しか残っていないものもある。又篇名はあるが、簡の残っていないものもある。しかし全体より考えれば「孫子」より多いことは明らかである。しかし「孫臏兵法」が一体何巻あつて何字あつたのかはより探究されなければならない。

第二には「孫臏兵法」が戦術の論述の上でかなりの特色があるということ。竹簡の中には△知兵▽△達道▽△立義▽などのことがみえるが、彼が戦争勝敗の決定要素を単に戦術問題だけでなく、さらに重要な要素があることを認めていたことが理解される。

以上は要約の引用であるが、竹簡の綿密な整理と検討がなされれば、「孫臏兵法」の特色はとり明確にされるはずである。

最後にこの墓の主人公がどんな人であつたのかが興味を持たれる所である。日本でも貝塚茂樹氏が朝日新聞でそれなりの判断を下しておられたが、とにかく墓の主人公が兵法にかなりの興味を示し、かつその兵書を大事にした人だということは認められよう。羅福頤は、この墓から武器が一つも出なかつたということを理由にこの主人公が武人ではなく謀士であつたと推測している。しかし謀士であつたのかどうかもより詳細な検討が必要であろう。

かくして長い間議論の続けられた「孫子」「孫臏」に  
 関して、その論議の終止符は一応打たれた。それなりの  
 新しい観点からの研究はこれからであるが、発掘の一つ  
 の成果は出たというべきであろう。またこれによって清  
 朝考證學者以来の意見の是非にも決定が下された訳であ  
 るが、これらの意見が否定されるものであったとしても、  
 それがそのまま學者の態度、功績を否定するものではな  
 い。と、いうことも我々は認識すべきであろう。軽々しい  
 臆測によって假説を立てることは慎まなければならぬ  
 が、客観的な思考と綿密な資料によって導き出された結  
 論でさえも、時には発掘によって出された一つの資料に  
 よって否定されることもある。しかしその真摯な態度が  
 いかにか今まで学会に一つの結論を与えてきたことか。  
 又逆に発掘その他の資料によっていかに正しい点が多か  
 ったかが証明されたことを考えるべきである。時として  
 は発掘された資料が古いからといって、そのまま信ずべ  
 きではないこともある。我々は発掘された資料に対し  
 てさらに考察を加え、是非の判断を下すべきであろうこ  
 とを最後につけ加えておく。

(昭和四十九年五月三十日稿)

資 料

文物 一九七四年第二期

孫子の思想史的研究

中国古典文学大系4「孫子」

戦国策校注

史記・「孫呉列伝」

孫子叙録

孫子序

二十子全書所収

佐藤 堅 司著  
 村山 吉 廣解説